置 賜 紬

Oitama Tsumugi

中 川 喜 市

1. 置賜紬とは

置賜紬は、昭和51年2月に通商産業大臣から伝統的工芸品「置賜紬」の指定を受け、現在では経済産業省、山形県、米沢市、長井市、白鷹町の指導のもとに置賜紬伝統織物協同組合連合会が中心となり振興事業を行っている。伝統的工芸品置賜紬には伝統マークを表示、優れた技術者には伝統工芸士の称号をおくり更に技術をみがきこれを後継者に伝えることを旨としている。置賜紬の伝統工芸士は置賜紬伝統工芸士会を結成、技術の向上、後継者の研修指導や会員の交流研修などを行なっている。

置賜紬は次の条件を満たして国の伝統的工芸品に指定された。

- ◎ 絁織物の産地では最北にあり「北限の絁」とも呼ばれる。
- ◎ 白鷹式高機（たかばた）織機による手織製品。
- ◎ 草木染料を使用した板絁（いたじめ）染色。
- ◎ 板絁特有の精密・精巧な絁。
- ◎ 織反物の「耳」は、ループ状になる。
- ◎ 織物の表面に鬼シボが立ち、肌触りが良くシワになりにくい。（お召）

白鷹式高機織機

板絁染色

精巧な絁模様

ループ状の耳

鬼シボ

図1 置賜紬の特長

KIICHI NAKAGAWA

置賜紬伝統工芸士会会長

置賜紬伝統織物協同組合連合会副理事長

〒992-0039 米沢市門東町1丁目1番5号

Tel : 0238-23-3525 Fax : 0238-23-7229

1. 主として日常生活に使用されるものであること。
2. 主要工程が手づくりであること。
3. 江戸時代以前からの技術や技法を受け継いでいること。
4. 江戸時代以前から使われてきた原材料を使用すること。
5. 生産地が米沢市を中心に近隣市町村にまたがり織物の「産地」を形成していること。

2. 歴史

山形県長井市の白蚕村にある白子神社は、古来、養蚕の神と仰がれ、和銅5年(712)建立と伝えられる。この社の周辺は置賜の地名で古くから養蚕が盛んであり、土地の人は前述の社の由来記をもって、この地域の絹織物発祥の拠り所としているが、他に史実らしいものは見あたらない。

『米沢市史』によれば、「慶長6年(1601) 上杉景勝が会津から移封されたとき、領内に真綿、紬、青苧等が産出されていた」とある。また、「慶長15年(1610) 直江山城守兼統が代官須田善右衛門忠長に命じ、現在の白鷹町に絹屋を設け、絹織物の製造を行わせるとともに、京都から織工を招き、ちりめんの製造を行わせたが失敗し、紬の製造には成功した」とある。したがって、この頃までにある程度の産地を形成していたのは事実であろう。下って享保10年(1725)には、江戸幕府へ絹・木綿織物を献上しているが、本格的な絹織物業の発達をみたのは明和4年(1767) 上杉治憲(鷹山)が家督を継いで以降のことである。安永5年(1776)には越後から縮師を招き、縮役場が設けられ、また仙台から藍師を招いて藍染技術の向上を図っている。続く天明2年(1782)には横麻袷地が作られており、文化年間(1804~17)には唐系織、絹縮、横絁などが織り出される。さらに文政年間(1818~29)には京都をはじめとし、結城、足利、越後から織工を招き、絁織、撚糸、染色等の技術も導入している。江戸末期には製織技術がほとんど確立され、今日に及んでいる。

置賜紬は、この地区で生産される織物の総称であって、その種類は主なもので6種あるが、いずれも先染の平織である。すなわち、米琉板絁小絁、白鷹板絁小絁、緯総絁、併用絁、草木染紬、紅花紬などであり、男女用着尺、袴、帯、袋物、その他である。

3. 技術

材料は、生糸、玉糸、真綿糸系(いずれも山形産)のほか、

図2 高機(白鷹板締絁織機)

図3 制作行程

染料(化学・植物)その他である。米琉板締小絁、白鷹板締小絁はともに生糸を使った絁織の一種で、生糸を糸撚機(八丁式、長谷式の2種類があり、温式撚糸法による)で撚り、麻袋に入れて石けんと重曹の水溶液で煮沸して、セリシン

や不純物を取り除く。下染め、糊付け、整経ののち、板締めにより絁染めを行い、製織時に柄合せを行う。白鷹板締小絁の経糸は、糊付け・乾燥を行ったあと、枠に巻き取り、湯でぬらしながら管に巻き取り、さらに撚機にその管をセットし、ふのり液でぬらしながら撚りを加え、枠に再度巻き取る。これは追撚という独特の工程である。また、しばを付けるために湯もみという工程が加わる。緯絁絁は生糸・玉糸・真綿糸糸を用い、緯糸だけ絁染を行ったもので、染色は手括り、手摺込み、型紙捺染などが行われるが、製織は、小絁とほぼ同じである。併用絁も経・緯糸に絁染め

図4 米琉板締小絁・白鷹御召 製造行程

を行うだけの相違で、製織は小絣とほとんど同じである。
草木染紬・紅花紬は、刈安、紫根、ログウッド(ヘマチン)、
紅花などの植物染料を用い、経・緯系を手括り、もしくは
手摺込みによって染色したものである。また、製織には手
投杼または引杼を用い、手機を使う。

以上、グラフィック社刊「伝統的工芸品技術辞典」より

4. 指定品

通産大臣が指定した伝統的工芸品「置賜紬」とは次の要件をみたしたものをいいます。

伝統的な技術又は技法

- 1 米琉板締小絣にあっては、次の技術又は技法により製織されたかすり織物とすること。

先染めの平織りとすること。

たて糸及びよこ糸に使用する糸は、「水より」をすること。

かすり糸は、たて糸及びよこ糸に使用すること。

たて糸のかすりとよこ糸のかすりとを手作業により柄合わせし、かすり模様を織り出すこと。

かすり糸の染色法は、「板締め」によること。

- 2 白鷹板締小絣にあっては、次の技術又は技法により製織されたかすり織物とすること。

先染めの平織りとすること。

たて糸及びよこ糸に使用する糸は、「水より」をすること。

地糸に使用するよこ糸は、「追ねん」をすること。

かすり糸は、たて糸及びよこ糸に使用すること。

たて糸のかすりとよこ糸のかすりとを手作業により柄合わせし、かすり模様を織り出すこと。

かすり糸の染色法は、「板締め」によること。

しば出しは、「湯もみ」によること。

- 3 緯総絣にあっては、次の技術又は技法により製織されたかすり織物とすること。

先染めの平織りとすること。

たて糸及びよこ糸に使用する糸は、「水より」をすること。

かすり糸は、よこ糸に使用すること。

かすり糸のかすりを手作業により柄合わせし、かすり模様を織り出すこと。

かすり糸の染色法は、「手くくり」、「手摺り込み」又は「型紙なせん」によること。

- 4 併用絣にあっては、次の技術又は技法により製織されたかすり織物とすること。

先染めの平織りとすること。

かすり糸は、たて糸及びよこ糸に使用すること。

たて糸のかすりとよこ糸のかすりとを手作業により柄合わせし、かすり模様を織り出すこと。

かすり糸の染色法は、「手くくり」、「手摺り込み」又は「型紙なせん」によること。

- 5 草木染紬にあっては、次の技術又は技法により製織

されたかすり織物又はしま織物若しくはこれに類する織物とすること。

先染めの平織りとすること。

たて糸及びよこ糸に使用する糸は、ベニバナ、カリヤス、ログウッド等を原料とする植物性染料を用いて染色すること。

かすり織物にあっては、かすり糸の染色法は「手くくり」又は「手摺り込み」によること。

よこ糸の打ち込みには、「手投杼」又は「引杼」を用いること。

伝統的に使用されてきた原材料

使用する糸は、生糸、玉糸、又は真綿のつむぎ糸とすること。

製造される地域

山形県、米沢市、長井市、西置賜郡白鷹町

製造者の協同組合などの名称

置賜紬伝統織物協同組合連合会

〒992-0039 米沢市門東町一丁目1番5号

電話 0238-23-3525

いろいろな種類がある「置賜紬」。

私の専門は「白鷹板締小絣」の「染め」ですが、細

図5 板締絣作業工程

密な柄の正確さが特色で、おそらくこの点では日本一といっても良いでしょう。これは、並べて張った糸 100 ~ 200 本を、ぴったり同じ模様を彫った木の板 2 枚ではさみ、その隙間に染料を注ぎ込むというやり方。板に彫った凹凸を利用して一度にまだらに染めるわけですが、糸を織り上げた時の柄まで狂いなく頭に描いて

行わねばなりません。白鷹の場合、撚糸、染め、織りを一通り経験しないとどの分野でも一人前にはなれないので、私もこの 3 つを全て学びました。置賜紬一般についてですが、時々陰干しをしましょう。絣染の場合、シワを伸ばす湯通しは専門店に任せた方が良いでしょう。(談)

セルロース学会第 12 回年次大会

主 催：セルロース学会 協 賛：(社)繊維学会
会 期：平成 17 年 7 月 21 日(木)~22 日(金)
会 場：九州大学医学部 100 年講堂
(福岡市東区馬出 3 丁目、地下鉄貝塚線・馬出九大病院前駅から徒歩 3 分)
連絡先：〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
九州大学大学院農学研究院 資源高分子科学研究室内 セルロース学会第 12 回年次大会事務局
TEL&FAX：092-642-2997(近藤) E-mail：tekondo@agr.kyushu-u.ac.jp(近藤)

第 18 回におい・かおり環境学会のご案内

主 催：(社)におい・かおり環境学会
協 賛：(社)繊維学会ほか
会 期：平成 17 年 6 月 9 日(木)~10 日(金)
会 場：東京工業大学 大岡山キャンパス(東京都目黒区大岡山 2-12-1)
連絡先：(社)におい・かおり環境学会(担当：重岡、小川、中辻)
〒101-0031 東京都千代田区東神田 2-6-2
TEL：03-5835-0315 FAX：03-5835-0316 E-mail：gakkai@orea.or.jp
http://www.orea.or.jp(4 月にプログラムを掲載いたします)

第 5 回マイクロ波効果・応用国際シンポジウム ~ 21 世紀の革新的グリーンテクノロジー ~

主 催：(財)産業創造研究所
後 援：(社)繊維学会ほか
会 期：平成 17 年 11 月 2 日(水)~4 日(金)
場 所：(独)産業技術総合研究所 つくばセンター
(茨城県つくば市東 1-1-1)
発表申込み締切り：平成 17 年 6 月 30 日
講演要旨締切り：平成 17 年 9 月 20 日
事務局(申込先)：〒113-0034 東京都文京区湯島 1-6-8
(財)産業創造研究所調査研究部内
シンポジウム事務局 担当 田中、水野
TEL：03-5689-6361 FAX：03-5689-6360 E-mail：mw-symp@iri.or.jp http://www.iri.or.jp/